

| Title | Interface humanities 05 |
|--------------|--|
| Author(s) | |
| Citation | |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/13019 |
| rights | (c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイス の人文学 / Interface Humanities |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



というイデオロギー対立も、

中東欧モダニズムの越

東西冷戦

代美術史学とユダヤ」

り上げられた、

「民族間の通貨としての音楽」「近

「世紀転換期のプラハ・ドイ

る諸分野にも開かれている点だ。

研究会報告で取

聴覚などメディアごとに分かれている芸術研究を横 約されている。この研究会の特徴は、言語・視覚

同時にまた歴史学や国際関係論など隣接す

ツ人社会」などの話題は、各報告者がそれぞれのディ

この地域の文化的複雑さだけではない。

インターフェイスの人文学/研究グループ紹介

モダニズムと中東欧の芸術・文化

文:編集部

レクター、出版者、

批評家、興行主、画商、そし

うした区分を相対化していく。 芸術家だけでなくコ

しかし、芸術と芸術研究が生成する現場は、

場合、芸術研究の制度は言語ごと、

れた国民国家の境界=国境だろう。

じっさい多くの 国ごとに展開

においてとらえることだ。

当の境界じたいつねに流

動的な中東欧地域に根ざした具体的な検討こそが、

民族、

言語のみならず、芸術ジャンルによっ

れる文化のダイナミックスを可能なかぎりその全体 界線沿いに間断なく生じてきた、モダニズムと呼ば 究グループがめざすのは、この地域を縦横に走る境

うした境界の最たるものは、言語によってかたどら

文学・美術・音楽・演劇といった芸術の研究はし

各種の境界線によって分断されている。

2

境性を長く隠蔽し、

してきた。

国境と芸術ジャンルをともに横断する、新たな研究スタイルの構築をめざしている「モダニズムと中東欧の ・文化」研究グループ。その活動を、ポーランドでのワークショップを中心に紹介する。

ばしば、

近を阻んでいるのは、 りこえる突破口にほかならない。 象である。 するいっぽう、アジアの東端にまで波及していった現 てまた研究者自身、 家や言語という枠に強く拘束されてきた。 中東欧のモダニズムの検討は、こうした現状を乗 とりわけモダニズム芸術運動においていちじる それは、 ヨーロッパ全域を巻き込んでアメリカに到達 作品を流通させている。こうした越境的性 にもかかわらず、これまでの研究は、 いろいろな芸術表現の分野を貫きな 国境を超えて往来し、 言語と民族がモザイクをなす 問題への安易な接 情報を 玉



度の問い返しにつながると考えるからである。 ても細分化されてきた近現代芸術の研究とその制

越境する研究ネットワーク

ズムと中東欧の芸術・文化研究会」(MCE)に集 二〇〇三年五月、懐徳堂春季講座 今年になって、 を企画するところから始まった私たちの活動 おおむね月二回開かれる「モダニ 「中欧三都市

Interface Humanities | 18

地域の芸術・文化がはらむ問題の系列を明らかにし Eの場で共有されることで相互に関連しあい、 向にあった。だが私たちがめざすのはネットワーク 際的な研究ネットワークの構築も重要な課題であ 術作品に描かれたユダヤ的形象の意味を再検討する てきている。 シプリンのなかで温めてきたトピックであるが、 面が強く、したがって二国間の関係に限定される傾 る。この方面もまた従来は国ごとの交流という側 こころみは、 ズマー」の演奏を聴きながら、 こうした領域横断的な研究活動とならんで、 また、東欧ユダヤ人の伝統音楽「クレ MCEならではの越境的な場となった。 初期シャガールの美 この M C 国 334 リガ ヴィルニュ 0 トルン ベルリン ワルシャワ

その一環として七月にポーランド • クラクフ キエフ ・ブダベス **ザグ**レ 中東欧のモダニズム芸術の拠点

ども、 を介することで予想以上の手ごたえだった。 たフィールドを踏査するのに必要なものは、 モダニズムの土壌そのものでもあるはずだ。 西欧や北米とは異なり、 おこなった研究者との交流や資料収集・実地調査な かたちで堆積している、 人間関係の豊かな厚みである。 それは、この地域の 今回の経験が私たちに示しているのは、 ワークショップで得られた人的ネットワーク 中東欧地域の文化情報と いまだシステム化されない いわゆる そうし



ポーランドでのワークショップ

ワークの双方向化に不可欠だ。

日本研究の現状を十分に把握することは、 中東欧地域でのモダニズム研究の水準だけでな

ネッ

こなったワークショップは、

私たちの問題意識やア ワルシャワとトルンでお

十一月十六日から二日間、

からマリノフスキー教授夫妻

(美術史)、

十月にチェ を迎え

コからシュヴァルツオヴァー教授(日本研究)

の多極化であり、

Eの活動成果を国際的に発信することで今後を展 えたことが、 際的な研究集会の設営にかかわり、 ディアスタッフにとっては、 な領域横断の体験である。 を企画・運営したことじたい、きわめてスリリング る地域に入って現地研究者とともにワークショップ ンに身を置いているメンバーにとって、研究対象とす 望する催しとなった。 ふだんは異なったディシプリ プローチ方法を現地の研究者に直接にぶつけ、 た、その後の数日間を利用して、 大きな財産になったにちがいない。 アクティヴなかたちで国 同行した大学院生とメ ポーランド各地で また議論にふれ M C

ことで、

活動を文学研究科の授業カリキュラムに反映させる

研究と教育の有機的結合をはかりたい。

構成=三谷研爾

国際研究集会を企画するとともに、

MCEでの日常

的枠組を超えてチームを編成し、 員と学生、そして研究支援スタッフが、 的フットワークにほかなるまい。



ジェンダーの視点から 問題知を共有する

ジェシカ・バウエンスさん (特任研究員)

クトがまとまってきているかどうか疑問に思っ すが、なかなか忙しく、関わっている研究プロジェ に時間が経ってしまいました。 おもしろいので

悩むときも多いです。 少しまとまってい

研究会をやったりしているうち、

あっというま

務めています。

ワークショップを開催したり、

研究グループ(通称「イメ日」班)で研究員を 二〇〇四年四月から「イメージとしての日本」

くところもあって、ほっとするときも。

思われる情報を求めることは妥当ではないどこ とすらあるのです。 ろか、ヒステリー的もしくは病理的とされるこ を疑問に思って質問をすること、 の問題でした。 料を集めたり流したりするときに直面する抑圧 とりわけ気になってきたのは、 誤った情報を提供されることに注目してきまし 害的処置がおこなわれたり、 ロフェッションである産科医から非科学的かつ有 はどこにあるのでしょうか。 ポピュラーカルチャーを扱う意義、 カルチャーを扱う「イメ日」 医療社会学を研究してきた私が、ポピュラー そこでキーとなる概念は、「検閲」です。 医療社会学とはいっても、 妊産婦の場合、 妊産婦に意図的に 班のメンバーとして、 私のこれまでの研 女性が情報や資 医師側の主張 産科医療のプ つまり必要と いやその訳

> ヤオイも「性」に関わる文化産物の一種と考 むジェンダーバイアスを明らかにしていく作業は えると、 の的になってしまいます。出産・妊娠と同じく ソフトで非現実的、 からみて害のないヤオイ文化産物の消費は批判 起こす波紋です。 小説・漫画 消費は当たり前とされているのに、 その想像と消費にかかわる言説にひそ <u>*</u> 欧米では、 が広がりっていくときに引き そしておそらく人権の視点 男性によるポルノ 比較的に

0

いと思います。 この問題をめぐるさまざまな意見をぜひ聞きた 春に計画されている海外ワークショップでは 非常に面白いです。

もないような、ことに女性に人気のあるヤオイ もはやサブカルチャー 味深いのは、 の受容等を詳しく分析しようとするとき、 イメ日」班でポピュラーカルチャーの外国で 日本において一般書店で売られ、 (サブ)といわれる筋合い 興

会学修士、九七年から日本に住み、現在は博士論文(文化・メディ た論文を執筆中。研究分野はジェンダー研究、とくに女性特有の ア・医療社会学)を作成をすすめるとともに、ヤオイ現象を扱っ ジェシカ・バウエンス (Jessica · Bauwens) 一九七二年ベルギー生まれ。 文学(日本学)・文化社会人類学・社

文化商品への「検閲」。四歳児の母

※「ボーイズラブ(少年愛)」をテーマにした小説・ 漫画。1970年代から流行しはじめ、90年代後半 以降インターネットを介して世界中に広まった。 アメリカなどではその内容から「病的」なジャン ルと見られることも多い。

何故、 をしていました。ここでしばし、 は始まると思います。 国語やヒンディ語でないのは何故でしょう。 語でしたか。世界に多数存在する言語の中で、 思い出してみてください。 んな素朴な疑問を持つことから、 何語を学習しましたか。 私は大学院入学以前に、公立中学校の教師 英語なのでしょう。 何の疑問もなく、 外国語の教科として 話者人口の多い中 中学生の頃を ことばの学習

の学習があります。 ニケーション能力に関する、ことばの伝達機能 学的能力、 だけではありません。文法的能力、社会言語 技能的側面や方法論を考えがちですが、 ことばの学習というと、 談話能力、 方略能力といったコミュ 四技能の訓練など それ

英語は「する」という人間中心の表現が多いと 日本語は「なる」という状況中心の表現が多く り取り方やものの見方が言語文化により異な いったことなどです。 とばの認識機能の学習があります。例えば、 ことばと文化の関係に関する知識を扱う、こ るなど、ことばの体系や規則と発想法の関係、 さらに、ことばによって、 世の中の事象の切

ます。 う問いは、この関係機能の学習で扱えます。 けるといった、ことばの関係機能の学習があり ことばと社会などの人間生活の諸相を関係付 民族的アイデンティティの象徴、 人の価値観や世界観を形成し、ひいては個性や そして、ことばは思考と密接に連結 私が取り組んでいるのは、これらの機能を盛 冒頭の疑問の一つ、 何故英語なのかとい ことばと国家 個

敬子さん (リサーチ・アシスタント)

COE若手研究会でも、

各自のディシプリンに

思います。また、隔週木曜日に開催されている 理解や差異の認識という観点が重要であると を紐解くにも、

言語観の相違ある他者同士の

組んでいるテーマである 「多文化共生」の概念

の接触と混交」グループの中で、 文化理解の第一歩になると思われます。

今年度取り

言語

捉え方の相違に気付くことは、

他者理解や多

象言語のことばに反映される価値観や物事の して、ことばの学習を通じて、母語と学習対 り込んだことばの学習を研究することです。



る研究会だと思います。

横断してゆく、ことばの臨床の場を体現してい に差異の認識から他者理解へとダイナミックに 尽きないのは、

とても興味深いことです。

にし共通認識へ繋がることばの模索へと議論が 基づいたことばの遣り取りから、相違点を明確

者理解へ繋がることば

松本敬子(まつもと・けいこ)

堂、二〇〇二)、 程在学中。専門分野は言語文化教育学。主 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課 におけるコミュニケーション」『言語文化学 教育学会、二〇〇四)、「アカデミックな場 の表現の変化」『英語教育研究』(関西英語 『言語文化教育学の可能性を求めて』(三省 な業績は「自己認識過程としての書く学習. (大阪大学言語文化学会、二〇〇四)など。 「概念メタファーと学習者

構成=三谷研爾

h.Topics

「インターフェイスの人文学」のさまざまな活動情報を紹介します

Event Report 2004

阪大フォーラム 「日本、もうひとつの顔」

2004年11月5日から7日にかけてストラスブール(フランス) で阪大フォーラム「日本、もうひとつの顔」が開催されました。

・阪大フォーラム」は、これまで阪大の主催で世界各

の基調講演、 ジャック・ルボー氏の講演と続いた。 メンバー た。フォーラムは宮原総長の挨拶で幕をあけ、鷲田教授 に心を奪われた。 フォーラムの会場である119ホールを あり、メンバーの誰もが「うらやましい…」と溜息をつい 街の美しさに、そして何より大学の建物や庭園の壮麗さ 日本を再照射して見せるという狙いで企画された。 含むパレ・ユニヴェルシテールは、さながら歴史的建造物で 幕末、近代演劇、マンガといった新鮮で多彩な切り口から 阪大から乗り込んだメンバーは、まずストラスブールの



発表者と聴衆の間で活発な議論が交わされた。会場には その数、二日間で延べ三百人にのぼった。どの発表の後も、 コンスタントに若い学生を中心に多くの聴衆が詰めかけ は会場の入りを大変心配していたが、蓋を開けてみると、



d'autres visages)」。伝統工芸、武士道、フジヤマ、ゲ

イシャといったステレオタイプの日本ではなく、死、中世

ク大学、テーマは「日本、もうひとつの顔(Le Japon

て開催された。 開催地はストラスブールのマルク・ブロッ の人文学」の成果を踏まえ、初めて人文系を主体とし 地の大学で開催されてきたが、本年は「インターフェイス













プログラム

11月5日

挨拶

基調講演「日本、もうひとつの顔」

講演「死者たちを覆い隠すこと:心敬(1406-1475)とシャルル・ドルレアン ジャック・ルボー (詩人) (1394-1465) ――あるフランス詩人の現在における若干の考察とともに」

第一部 (日本:死の文化の伝統と現在)

「死の習俗―その伝統と現在」

「日本神話と神社神道における死の観念」

「君主の墓一日本とフランス」

「戦後日本のポピュラーカルチャーのなかの『戦争』と『死』」

中村生雄 (大阪大学教授)

宮原秀夫 (大阪大学総長)

鷲田清一 (大阪大学副学長)

フランソワ・マセ (INALCO:国立東洋言語文化研究所教授)

江川 溫 (大阪大学教授)

伊藤公雄 (大阪大学教授)

11月6日

第二部〈日本の相貌〉

「中世日本の二重の顔」 「フランス人が見た幕末日本」

第三部〈演ずる日本〉

「日本古典演劇における女性」 「近代日本演劇とその分身」

「近代日本漫画の言葉と身体」

荒木 浩 (大阪大学助教授)

柏木隆雄(大阪大学教授・文学研究科長)

ジルー村上 栄 (マルク・ブロック大学教授)

永田 靖 (大阪大学教授)

林 于竝(国立台北藝術大学演劇学系助教授)

金水 敏 (大阪大学教授)

吉村和真(大阪大学 COE 共同研究員・京都精華大学マン ガ文化研究所研究員)

11月7日

日仏若手研究者フォーラム

「インターフェイスの人文学一若手研究者による日本研究の現在」

23 | Interface Humanities

交歓することとなった。 専門店に誘われて、 そこでさらに多くのマンガ・ファンと れようは想像を遙かに超えるものであり、 彼の地における熱狂的な受け入れら マンガやゲーム等、 図らずも、 日本のポピュ

会ぶりも、

参加者の心に強く印象づけられた。

さらに金水、吉村氏と伊藤教授は彼らに日本マンガ

若いマンガ・ファンが発表者のもとに詰めか

果となった。

もうひとつの顔」をメンバー自身が見せつけられる結

日

最後の金水・吉村のマンガに関する

ニケーションは極めてスムーズであった。 個々の発表もさる 同時通訳用のブースが設置され、質疑応答を含めて、コミュ

和田章男教授のフランス語による見事な司





での研究活動が市民社会にいかに接続されるのかをめぐっ 企画を担当しておられる谷本裕氏の参加を得て、 動されている春日匠氏、 クチャーのあと、「科学技術と社会」「芸術と芸術研究の は、プロジェクト・リーダーの鷲田清 一教授によるキーレ ワークショップを引き継ぎつつ、今年度からスタートした ショップが開催された。これは、 として、今年度の「インターフェイスの人文学」ワーク なる「地域から、地域を超えて」セッションがおこなわれた。 大学研究推進室文系ワーキンググループとの共同開催に あいだ」と題したふたつのセッションがもたれた。 第二日は くかを議論する場として計画されたものである。 第一日 人文学研究における横断性と臨床性をいかに実現してい 若手研究員を中心とする「研究集合」の活動を集約し 学知のかたち、 最初のふたつのセッションでは、NPO法人を拠点に活 組織のかたち」セッションののち、大阪 ならびにコンサートホールで事業 前年九月におこなわれた

COE Workshop

2004 年度「インターフェイスの人文学」ワークショップ

2004年12月20日と21日の両日、大阪大学中之島センターで、 2004 年度「インターフェイスの人文学」 ワークショップがひらかれました。

Event Data

イベント情報

2004年8月1日~2005年1月31日に開催さ れた主なイベントをご紹介します。各イベントの詳 細ならびにその他については、ホームページ (http:// www.let.osaka-u.ac.jp/coe/) をご参照ください。

主なシンポジウム・ワークショップ

10月30日

一二月二〇日と二一日の両日、中之島センターを会場

2004年 8月9日~11日 第2回全国高等学校歷史教員研修会

> 9月19日 死別の悲しみからの回復を助けるワークショップ

9月25日~26日 「イメージとしての〈日本〉」若手研究者交流ワークショップ

10月29日~30日 ワークショップ 「海から見た東北アジア:東南アジアとの対話」

財団法人ラスキン文庫創立 20 周年記念シンポジウム

11月30日 第1回地域研究ワークショップ「世界史とアジア研究」

12月1日~5日 第3回対話シンポジウム

2005年 1月21日 第3回多言語社会研究大会

1月22日 海域アジア史ワークショップ

定例研究会

「モダニズムと中東欧の芸術・文化」研究会 (第7回~第11回) トランスナショナリティ研究セミナー (第29回~第45回) 海域アジア史研究会 (10月例会・11月例会・特別例会)

基調講演にかえて

鷲田清一

第1セッション「科学技術と社会」

コーディネーター/中岡成文

ゲスト

春日 匠 (NPO 法人サイエンス・コミュニケーション事務局)

発表者 家高洋・加藤謙介・佐藤貴保・屋良朝彦

第2セッション「芸術と芸術研究の間」

コーディネーター/三谷研爾

ゲスト

谷本 裕 (ザ・フェニックスホール企画・事業担当)

発表者

三谷研爾・藤本武司・樋上千寿

第3セッション「学知のかたち、組織のかたち」

コーディネーター/鷲田清一・金水 敏

ゲスト

吉村和真(京都精華大学マンガ文化研究所研究員)

発表者

森 宣雄・加藤敦典・山内晋次・表 智之

第4セッション「地域から、地域を超えて――研究の視座を求めて」

コーディネーター/栗本英世

新しいかたちの研究の予兆も強く感じられた。

(0000)

足立 明 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授) ゲスト

杉原 薫 (大阪大学大学院経済学研究科教授)

臼杵陽(国立民族学博物館・地域研究企画交流センター教授)

黒木英充(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授)

小泉潤二・春日直樹・中川 敏・栗本英世 発表者



外で地域研究をリードしてこられた杉原薫、足立明 にたっておられる吉村和真氏をまじえた第三セッションで フが中心となり、 熟しつつあり、 さらにそこにメディアスタッフが参加してい クショップ準備にあててきた えのあるワークショップであった。 問題群が明確に共有されつつあるという、 たしかな手ごた 位置づけをめぐって分厚い議論がおこなわれた。 について問題点が浮き彫りになった。 人間科学研究科人類学研究室のスタッフにくわえ、 全体として、 現代のメディア状況を見据えた人文学研究の可能性 黒木英充の各氏をゲストに、 「インターフェイスの人文学」 が問うべき さらに大学におけるマンガ研究の最前線 「研究集合」において議論が

地域研究そのものの

て、トピックが展開した。 若手研究員およびメディアスタッ

CSCD Center for the Study of Communication-Design

中心コンセプトは、 と一般市民 、大阪大学コミュニケーションデザイン・ 市民に信頼される科学 利害関心の異なる人々をつなぐコミュニケー 一〇〇五年四月に開設 クの構想 人文学のインターフェイスともつなが · 設計」 技術者を養成する一方で (鷲田教授) される。

という

医療福祉、

安全・安心、

アートやボランティア活動など

社会のコミュニケーションを幅広く促進することをめざす

また、この半年間をワー

コミュニケーションデザイン・センター発足

2005年4月、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター がうごきだします。

最終セッションでは、

学内 63

0 悩ま 4 関係

ムなどの 性や暴 レクトに えるの h 黒人描写が があ か。 3 0 か、 「差別的」とする抗議が大阪の市民団体によっ 九九〇年秋、 例えば 「『ジャングル大帝』 手塚治虫『ジャングル大帝』 問 題

業の側にすべて負担させるため、 が発想の根底にあるのか、 の法的規制はあっていいし、 そして差別を扱ったものは特にそうだ。 市場原理の それを怖れてメディア企業の側が自主規制を行うこと ポピュラーカルチャー= 規制の基準が曖昧で審査過程も不透明で 一つとして見れば当然のことだろう。 規制によって生ずる不利益を企 市民社会から批判されること 害悪というような観念 年齢制 限など むろ 載されているが、 と手塚プロダクションのこの問題に対する公式見解として、 な影響をもたらした。 てなされ、 全集各巻の末尾に 示を差し替え、 神戸市立博物館で開催中だった手塚治虫展 図録販売を中止するなど各方面に大き 「読者の皆さまへ」 『手塚治虫全集』の出版元・

講談社

問題を考えてゆくうえでも決して適切な処置とは思えない 3 けた人で、 モアの最も重要な手法のひとつ」であること。②「作者は(中 特徴を誇張してパロディー化するということは、 「第三者が故人の作品に手を加えることは すべての憎悪と対立は悪であるという信念を持ちつづ 物語の底には強い「人間愛」 要点としては次の三つである。 と題する注釈文が掲 が流れて」いること (中略) 漫画のユ ①「人々の

不幸にしてポピュラーカルチャーにはそ 1律性を わか 価 カ とだが、 表現はマンガの本質の一つである。 て黒人を描くのもそれと同じことで、そういった類型的 に目が大きくというように。 き分ける。 マンガは 問題は、 人物の特徴を誇張することでキャラクターを描 背の低いキャラは極端に低く、 そういう絵を見て私たちがなぜそれが黒 ギョロ目や分厚い唇を強調し ①が言うのはそういうこ 美男美女は極端

表 智之(おもて・ともゆき)

権と部落問題』に連載している。 別と向き合うマンガたち」 文学の急務の一つであろう。

ま私は、

吉村和真氏·田

中聡氏

とのリレー

ーコラム

一差

はその絵を黒人と理解できる。

マンガを描くことも

世の差別意識と決して無縁ではあり得ない。

作品を通じた作者と読者のコミュニケー

ションがそ

蛮さん

のしるしとして扱ってきた歴史があってこそ、

を部落問題研究所の機関誌

人

マンガと差別はどう関わ

それは、 5 論の場

を維持していくこと――これからの大学の、

特に人

家が植民地住民を類型化して捉え、

ルチャーを保存し、

その全体像を捉える視点を提供

議

人だとわかるか、

という点にある。

日本も含む帝国主義国 その身体的特徴を

は社会に害をなすとみなされるものまで含め、ポピュラー

売れなかったものやつまらないもの、

あ

3

システムが必要だ。

がなかった。

保つには、

公権力や市場原理とは別のアカデミックな評

るが、文化を市民社会になじませつつ、

かつその

自

ろんない。

引き起こす魔女狩りをこのまま放置していいわけではもち

و لے

伝統文化や芸術の場合を考えてみればよく

用面の問題はあるものの、「メディアには一定の規制がされ

るべき」という原則自体は正しい、

公権力による弱い者いじめや、

市民社会が時に暴走して

というのが私の立場だ。

大きく結果的に弱い者いじめになっていること。

小さなメディアほど打撃が

それら運

あること。

ん問題は多い。

も

\$

九

結びつくものだけに、

社会から危険視されやすい。

ポピュラー

カル

チャ

は

人間

の喜怒哀楽とダイレ

画

やマンガ、

ポップミュージックやビデオゲー

1969 年大阪生まれ。 大阪大学大学院文学研究科博士課程修了、博士 (文学)。 専門 分野は思想史・マンガ研究。 おもな研究テーマは① 19 世紀に流行する骨董趣味が近代 の歴史学・考古学・美術史学の成立に与えた影響について、②マンガやアニメを一種の 教養として生きることの意味について。e-mail:QVG01014@nifty.com

しい、 差別的 が③だ。前述の連載をまさにそういう議論の場にしたいと の個所をただ改変すればいいというものではない、 かけて注意深く議論する必要があ はむしろ反差別的なのだ、 ②が言うのはそこで、 別を生みだしているかどうかとはひとまず別の問題である。 にも必然的に根ざしているということであって、 0) なものになるし、 時 代の社会の共通認識にもとづく以上、 ということである。 な技法を使っているけれど、 意見が分かれることもあろう。 黒人の描き分け方はたしかに旧 そういった判断はきわめてデリ 手法では 5 なく目 その 意味でも、 世の 差別意識 時 いう 問 間

私たち三人は考えている。 作品のメッセージとして 的で判断して欲 作品が差 来の

的に読 る。 ゆえにかえっ 快楽をも描いた作品、 板な作品が概して退屈なものになりがちなのもそのためだ。 人間の心には、 の差別 人の人間の中に同居している。 力的に描いた作品ほど名作たりえて、 るための議論では決してない。 ただしそれは、 この 悩 意識に根ざして描 まし て、 差別を憎む心と差別を楽しむ心の 可能だし、 差別意識にゆさぶりをかける力も持ってい 差別的な作品とそうでない作品 両 面性にどう向き合うか、 善なる主人公が乗り越えるべき悪を その かれ、 逆もあ 例えば手塚の作品 差別の痛みと共に差別 読まれるマンガは、 りうる。 善をのみ描いた平 注意深く を選 そもそも を差別 両 それ 方 b



論を続けていきたい。

2004 12 eNo.725 ・特集・ 外国人労働者の受け入れと人権保険

14 547 54 14 100 14 100 14 100 16 14 100

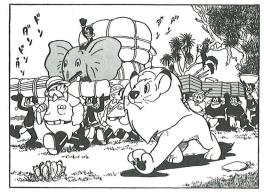
社団法人 部落問題研究所 発行

http://www.burakken.jp

『人権と部落問題』(2004年12月号)。

RELIEBODEN/FERENAL 7536/1597518 0808/169848880#888 NEUROSEK/#8

手塚治虫「ジャングル大帝」の1コマ(『手塚治虫漫画全集1ジャングル大帝①」15頁、講談 社 1977年)。ギョロ目と分厚い唇を強調した顔で黒人が描かれている。



同じく「ジャングル大帝」より(『同全集3ジャングル大帝③』89頁、講談社1977年)。 ライオ ンの顔もこのように誇張して描くのが手塚の画風であり、黒人の描き方だけを取りあげて「差別」 と簡単に言い切ることはできない。

※ Fの図版は著作権法第32条第1項によって認められた引用である。

0

高齢者施設での動物 ボットを介したケアの事例より

を介してケア 犬とのふれあ 等、 様 々なプログラム が行 わ n

には、正確には、『動物介在療法』 様々な治 グ セラピー ファイ の実施場面全体に生じる変化を記述・分析す ルドにおいて、 私 は、 主に観察者として、 F.

目標を設定し、 前者は、 ボランティア等が、 方、 対象者 後者 通して、 けでなく、 る役割を担っていた。 様々なかたちでフィールドの人々と交流した。 各種ミーティングやドッグ・セラピーへの参 もちろん、ただ観察・記述をするだ

療場面に動物を介在させるものであり、

医療従事者と協力し、

治療計画·

|効果」を記録・評価する治療法である。

物介在活動』

の区別が設けられている。

P

(アニマル・セラピー)

を行う治療・活動に注目が集まっている。

近

様々な場面において、

動物やロ

ボット

動物を介したケ

動物と対象者とのふれあいを目的とするレクリエーショ これらの方法論 ボ に、 もした。 A病院での介護実習にも参加し、 高齢者介護を「体験

『ロボット介在活動』と呼ばれている。 動物・ロボットを介したケアの ダイナミックスを まず、 なものに変わった。また、対象となった高齢者に様々な変 者だけでなく、 A病院でのドッグ・セラピーは大変な好評を博し、 犬を中心とする場の 病院という集団全体に変化をもたらした。 〈表情〉 が、 あたたかく和やか 対

現場に関わることとなった。

ここでは、二つのフィー

専攻しているが、

縁あって、

は、

集団

「の変化を検討するグループ・

を踏襲し、 ンであり、 は、 へ の

物

の代わりにロボット

を用いたものは、

綿

密な治療計画等は設けない。

介在療法』

のフィールドに関わった。 兵庫県にある老 ルドを いた 化をもたらした。 連れてきたらどうか」等、 れない」「犬があれほど喜ばれるなら、 高 面 化が見られた。「もう立てないのでは」 と思われていたおじ んで会話できないのでは」 いさんが、 齢者らの変化は、 の笑顔で犬や周囲の人と会話をする様子が観察され 小走りで犬に餌をやりに行ったり、 「あんなに元気ならオムツが外せるかもし 施設職員らによる介護の方法にも と思われていたおばあさんが、 ドッグ・セラピーに直接関わらな 他の時間にも犬を 病気が進 満

|痴呆疾患治療病棟A病院で実施された、

犬を用

九

九八年四月より

約

年

間、

私 は

加藤謙介(かとう・けんすけ) 2004年3月大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間 科学)。専門はグループ・ダイナミックス。これまで、高齢者施設における動物介 在療法・ロボット介在活動を事例とし、集合体の全体的性質(集合性)の変容過程 について、研究を行ってきた。

プログラムの流れ 0 セッション開始前 \odot 対象者 5~10名 0 施設職員 1~2名(介護) AIBO-Master 1名 (進行係) 施設職員 対象者を室内に誘導

4

1 セッション開始 . \odot \odot 0 AIBOの電源ON AIBOに『ごあいさつ』の指示

セッ ショ は、

ラショ ンでは、

ン中

犬のストレスを十分に考慮しつつ、

犬にボ

その

後、

私は、

一〇〇二年五月より約十ヶ月間、

高齢者

4

を投げる

ボ は、 犬

ル投げ」、

院職員と協働し、 協会職員と、 A病院でのドッ 動物介在療法

毎週一

回約

時間実施された。

対象者

面でも、

様

々な新しい取り組みが

行

わ

れることとな

特別に訓練されたセラピードッグとが、

グ・セラピー

は

NPO法人日本レスキュー

F

ッグ

・セラピー)

施設に入所する高齢者のべ五十五名であり、

毎回のセッ

た。 い場

私の観察ノートや分析結果は、こう

した変化の記録

つとして、

実践の場で活用された。

頭、

高齢者十名のグループが設けられた。

て歩く「スプーンリレー」、

犬に服を着せる「着せ替え」、 スプーンに餌を載せ犬に向かっ

施設におけるロボットを介したケアのフィールドにも関わる

の実践、 在活動 て、 こととなった。 して、ペット型ロボットを用いたレクリエーション場面の記録 ト型ロボットを持ち込み、 の場合と異なり、 したロボット介在活動の実践に参与した。 ドッグ・セラピー 每週一回約一 の実践家としての役割を務めた。 職員との交渉、 私は、 このフィールドでは、私自身が施設にペッ 時間、 兵庫県内の有料老人ホームKにおい 施設に入所する高齢者を対象に 入所者との会話等、 ロボットを用いた娯楽プログラム また、 ロボット介 研究者と

フィールドワークの成果たり得るのではないだろうか。と。それらの『声』のざわめきから生み出されるものこそが研究者自身の『声』とフィールドの『声』が重なり合うこなかった。フィールドで当事者らと共に悩み考える中で、

流は、 声 践家」である私が素人同然だったため、 ドにおいて、 ・型ロボットをめぐる参加者との 幸い、私の拙いレクリエーションは概ね好評であったが、 大いに助けて頂くこととなった。 に、 理論的にも実践的にも、 実践家兼研究者として、 層耳を傾けなければならなかった。 ロボット介在活動の枢要で 「会話」、 高齢者や施設職員の 私は、このフィ 施設職員や入所者 即ち 特に、 一声 の交 ペッ 実

分析を行った。

ある。 何度も自問自答した。 を続けながら、 専門性に、 とはまた別の、だからこそ強烈な迫力を持っている。 フィールドは、 な種類の智恵や専門性と交わることでもある。 ルドから聞こえるこれらの くことは、 るNPOらの様々な 介護を行う施設職員、 私は、 フィールドの智恵や専門性は、いわゆる「学術的な知 これらのフィールドにおいて、 単に実践家や当事者と関わるだけではなく、様々 絶えず揺さぶりをかける。 臨床 私は、 声 自分が研究を続けることの意味を、 の場だけでなく、 そして、ドッグ・セラピーを実践す に出会った。 声 は、 私が持っているはずの 施設で暮らす高齢者 フィールドへの参与 フィールドに身をお 「横断」の場でも この意味で、 フィ・

私の研究の成果物は、

彼らの

『声』なくしては存在し得



あることが明らかになった。









4

テキス

フランス古典主義演劇の校訂テキストをめぐって一 から 卤

たことに疑問を感じるの が普通であろう。 L かし 方で、

ラシーヌ像そのものに対し、深刻な異議申し立てが行われ よって、従来のラシーヌ研究のみならず、 をめぐる論争をはじめ、 た世紀の終わりにふさわしく、そこで扱われるテーマや視 しが行われた。 フランスでは、 一六三九一 フランス古典主義の代 一六九九) 講演、 ロラン・バルトの シンポジウムをはじめとする多くの催 一連の の没後三百年にあたる一九九九年、 表 的 劇 「新批評」に属する言説に 『ラシーヌ論』 (一九六三) 作 家、 フランスにおける ジャン・ラシ 1 ヌ 新

音楽学、 社会学、 教育学など、 極 が、その後学校教育の中で固定化され、フランスの誇る 十九世紀に成立した文学批評の産物にほかならない。 いられてきたテキストの句読法は、 させる代物であることも確かだ。

点は、

文学、

演劇学、

めて多岐にわたった。

この年の大きな成果のひとつは、

ジョ

ルジュ・フォレスティ

字塔『ジャン・ラシーヌの栄達』(一九五六)の作者で、 加わったことだろう。これは、ラシーヌの伝記的研究の金 トと激しく対立したレーモン・ピカールによる旧版(一九五 バル

エ校訂の新たなラシーヌ演劇全集がプレイヤード叢書に、

研究に新たな可能性を付与する提案を行ったものだ。 の成果を否定するものではないが、従来からのテキスト

それまでの研究用底本がオリジナルの句読法を無視してい のは、 ティエが行ったことはしごく当たり前のことであり、 綴りは現代風に改められている。 フォレスティエが重視した ではない。 に出版され、 えられる場合をのぞいて、 ミコロン、 フォレスティエ版は、 句読法だ。 疑問符といった句読点類が、 他のプレイヤード叢書と同様、 十七世紀の正書法をそのまま活字に組んだわけ テキスト校訂の基本から考えれば、 詩人自身が眼を通しているものを採用した。 新版では、ピリオド、コンマ、 本文テキストとして、 入念に再現されている。 明らかな誤植と考 十七世紀特有の ラシーヌ生前 コロン、 フォレス むしろ セ

> テキスト解釈を保証していた。ところが、この解釈自体 面で納得のゆくように改変されたものであり、 「精緻な心理の自然な描写」であるとされるラシーヌ劇 版が採用したオリジナルの句読法が、 反対にこれまで一般に用 統語論的、 現代の読者を当惑 またそれが、 意味論的な

いる。 紀の偉大な俳優たちの解釈を脱してはいないのと符合して とされるコメディー・フランセーズの舞台が、やはり十九世 このことは、 になったのである。 典」として制度化され、「ラシーヌ神話」の一翼を担うこと 現代においてラシーヌ劇の「伝統的」な演出 バルトが問いただしたのもこの点だっ

ストは、 だから、 ものなのである。 句読法は、 によるリズムの指標であるのだ。 的あるいは意味的な区切りである前に、 のは後世のことである。 種のテキストを目で追い思索にふける読者が主流となった 音節で、 十七世紀において、 当然朗誦が前提となる。 あくまで声を出して読むためのものだった。 二行ごとに韻を踏む定型詩の形式が多い) 朗誦対象としてのテキストに立ち返ろうとする 詩や演劇 そもそも、 (とりわけ悲劇は フォレスティエが提 従って、 詩行から成り立つもの 声の区切り、 句読点は、 行十二 一示する の

かれるデュパルク嬢との懇ろな語らいも、 ラシーヌは自作のヒロインを演ずる女優シャンメレー 映画『女優マルキーズ』に描 恋の口説だけでは 嬢に

口ずから朗誦法を伝授した。

藤本武司 (ふじもと・たけし)

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学(フランス文学)。フランス古典主義、 とりわけ悲劇詩人ラシーヌを中心に研究を行っている。ラシーヌの作品解釈論文の他、『エ クリチュールの冒険一新編フランス文学史』(大阪大学出版会、2003年、共著)など。

のフランス語の形が整いつつあったものの、 なったリュリは、 子音が詩句の行末において保持されていた事情がある。 るわけでは勿論ない。 のような試みを現代フランスの観客がこぞって受け入れてい 当時の上演を再現する活動をすでに始めている。 朗誦法をはじめとして演技・美術・音楽のすべてにわたって 督として知られるウジェーヌ・グリーンは、フランスのみな 劇を当時の形で上演しようとするひとつの潮流をもたら ヌに限らず当時の劇作家の常であった。 台での上演とは別に、このような たちにはシャンメレー嬢の朗誦法を学ぶよう奨めたと言う。 に合わせようと、 ては、 方ラシーヌは、 フォレスティエによる新版の出版は、 サロンや王族の前で頻繁にその朗読を行っている。 また、『バロックの声』(二〇〇一)の著者で、 イギリスやイタリアの演劇テキストも含めて、 当時日常会話では発音されなくなっていた語末の 自らの音楽悲劇をフランス宮廷人の趣 自作を宮廷や劇場で上演するのと前後し ラシーヌ詩の秘密を探るかたわら、 たとえば、 「演奏」を行うのは、ラシー 十七世紀にはすでに現代 古典主義時 詩句の朗誦に 映画監 代の 俳優



ラシーヌの肖像 (大作家叢書版全集のアルバムより)

Voilà comme, occupé de mon nouvel amour, Mes yeux, sans se fermer, ont attendu le jour.

(プレイヤード叢書旧版。中等教育で用いられる所謂「教科書版」も同様)

Voilà comme occupé de mon nouvel amour Mes yeux fans se fermer ont attendu le jour.

(1670年の初版。フォレスティエのプレイヤード叢書新版は「の表記をsに変えているが、 句読法は初版のまま。シンタックスに配慮した句読点が全くない。)

している。 ラールは「時代にそぐわない」としてラシーヌを上演しなかっ になりかねない。 から意味を覆い隠し、 のような歴史的事実に忠実な上演の再現は、 いかに測定するかは、 の意図と、 の探求をめざしている私としても、 「古典」の研究と演奏は、こうした問題につねに直 「現代においてラシーヌを演奏する方法と意味 現代の様 かつてTNP劇場を主宰したジャン・ヴィ 々な層に属する観客の意識とのずれを 大きな課題だ。 旋律の魅力のみに心を奪われること 「古典」 研究· 現代の観客

なかったはずだ。

イタリア出身でヴェルサイユの音楽監督と

《編集後記》 「不安」をめぐる特集記事を編集しているさなかの年末、 インド洋沿岸各地を巨大な津波が襲いました。おそらく21 世紀最大の自然災害のひとつになるだろうと思われる、惨禍 です。こうした出来事の記憶を言葉によってかたどること、に

もかかわらずかたどりつくせない深みにまでに思いをよせること。 言葉を手がかりに人と人とを結びつける可能性について

考えることこそが、人文学的思考のありようを鋳直していく契 機になるにちがいありません。

さいわい研究集合が軌道に乗り、またメディアスタッフも 参加する新しい研究スタイルの模索もはじまりました。日々の 営みの積み重ねが、ようやく実を結びつつある感じです。(M)

大阪大学21世紀COEプログラム 「インターフェイスの人文学」ニューズレター Interface Humanities 05

発行=「インターフェイスの人文学」研究開発委員会 編集長=三谷研爾 編集=永田靖 金水敏 山中浩司 ロゴデザイン=奥村昭夫 編集協力・デザイン=彩都メディアラボ株式会社 レイアウト=西田優子 清水良介 印刷=岡村印刷工業株式会社

発行日 = 2005年2月28日

連絡先 = 〒 560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学大学院文学研究科内 「インターフェイスの人文学」事務局 Phone: 06-6850-6716 Fax: 06-6850-6718 http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/ coe_office@let.osaka-u.ac.jp Osaka University
The 21st Century COE Program Newsletter
Interface Humanities 05

Published by COE Committee Interface Humanities
Chief editor: Kenji MITANI
Editors: Yasushi NAGATA, Satoshi KINSUI, Hiroshi YAMAN.
Logo Designer: Akio OKUMURA
Editorial advisor: Saito Media Lab Co., Ltd.
Layout: Yuko NISHIDA, Ryosuke SHIMIZU
Printed by Okamura Printing Industries Co., Ltd.

Published on February 28, 2005

Contact address: Interface Humanities Office School of Letters, Osaka University 1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-8532 Phone: +81-6-6850-6716 Fax: +81-6-6850-6718 http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/ coe_office@let.osaka-u.ac.jp

